

# コスモス 29

第4次  
1980・6

## 作品

伊藤 正齊	8
小宮 隆弘	10
緒方 宗平	11
河合 俊郎	12
和田 英子	13
宮田 正平	14
寺島 珠雄	15
近藤 計三	16
高島 洋	16
北本 哲三	18
押切 順三	18
申 有人	20
西 杉夫	22
山野 チエ	27
暮尾 淳	30
吉田 欣一	31
梅田 智江	32
向井 孝	32
野口 清子	35
長谷川七郎	36
木原 実	38

コスモス雑記

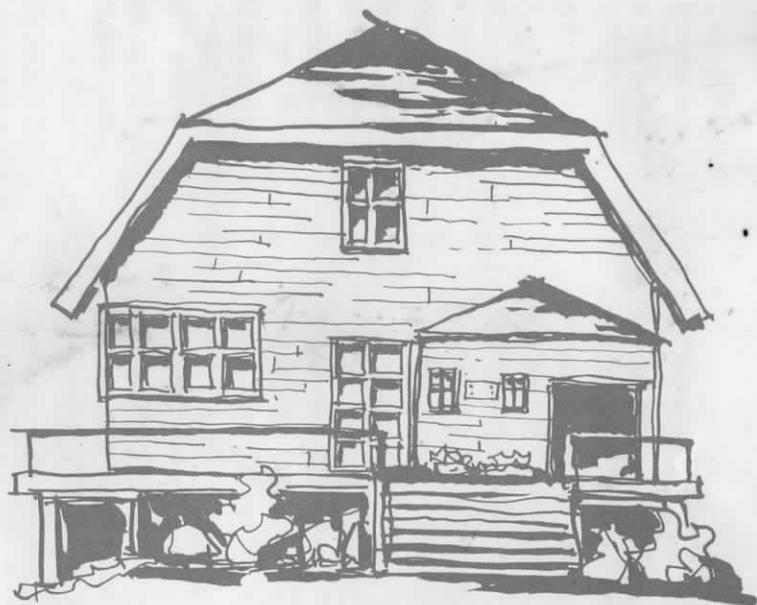
前号作品評

はなしの自由席

詩をなぜ？ 書く

黒川	秋山	吉田	小宮	伊藤
	清	欣一	隆弘	正齊
2	26	30	28	24 21

B 152



白馬乗鞍山麓小谷高原

ロッヂ

かんでら

399-94長野県北安曇郡小谷村大字千国

phone 02618-2-2755

本社=104東京都中央区京橋2-7-7

phone 03-561-3143

定価 五〇〇円

## 眼病記

河合俊郎

今年の一月二八日、空は青く晴れわたり風もない午後三時、私は庭の雑草をむしりながら、ふと家の方を振り返った時、あれと思った。

眼の中に、くもの巣か糸屑のような黒いものが舞っている。眼鏡をはずし、顔をほららつてみても取れない。しばらくまばたきをしたり、眼鏡の玉を拭いてみても同じこと。右下の方には黒い小さい蝶も舞っている。不思議だな なんだらうと空を仰いで、左眼をつむったり右眼をつむったりしてみても変わらない。左眼の方がひどい。

考えた末、隣村(伊良湖)の藤原医院へ電話してみた。このお医者さんはテッチャンと呼ぶ、私と

同じ年の親類の人で心易い。一部始終を話すと、わたしのところへ来ても駄目だから専門の眼科医へ行けといわれ、田原の真知さんがいいね、とつけ加えた。

早い方がいいと思って、すぐに家から二〇キロ離れた田原町にある真知眼科医院へ車とばした。二時間半待たされて、やっと診察を受けた。様子をくわしく尋ねられ、視力表から始める。あらゆる検査が終った時は夕暮れになっていた。

真知博士の診断は、初発白内障であった。細かい字を読んだり書いたりしないこと、テレビもほとんどに見ること、だいたいようぶ見えなくなるまで一〇年はかかるよという話であった。

それから一ヶ月、私は眼薬をさしたり、黄色い玉の薬を飲んだりしたが、一向に変わりはない。読み書きに不自由ではないが、あと一〇年をはっきりしたいと思って、豊橋市の有名な眼科医鈴木さんに診察してもらったところ、この先生は、心配いらん病気じゃないと

はっきりいわれた。私の眼には相変らず蝶や糸屑が舞っているのに心配いらん病気じゃない、という言葉に秘められた白内障宣言の心を読みとった私は、後一〇年か、三六五〇日しかない。明日になれば三六四九日、今のうちに仕事しなければという焦りと、眼より肉体が先に終るからという投げやりの気持が交錯し、落着いていられない。とも角、仕事に見切りをつけなければと今は考えている。

## 管野須賀子の針箱

木原 実

「玄関わきに四畳半の小座敷がある。襖のすきからのぞくと小机があつて、書物がたくさんあつて、筆箱があつて、その上に針箱と鏡がのつてゐる。幽月君の居間らしい」。大逆事件に連座した奥宮健之が、明治四十二年千駄ヶ谷の平民社を訪れたときの文章に、そんな箇所がある。

その管野須賀子(幽月)の針箱

が、故人になつた池袋の岡田宗司氏のお宅にあるというので、友人が見に行った。友人は法政大学の大島清さんに頼まれて、できればそれを大原社研に寄贈してもらえないかということのでかけた。岡田さんのお宅に針箱はたしかにあった。

ところが岡田さんの奥さんのはなしでは、いつか荒畑寒村さんがみえて「これは須賀子のではない、お玉のだ」といって、わざわざその針箱に箱書きをかき、寒村お玉と署名して帰つたという。お玉さんは寒村さんの亡くなつた糟糠の妻とでもよぶべき人である。

岡田さんの奥さんは困つた顔で、「大原に寄贈していいんですが、でも寒村さんがそうおっしゃるんですから、私が死ぬか寒村さんがいなくなつてからにして貰えないでしょうか」と、友人にいつたそうである。

この針箱が、大島教授が見当をつけたように須賀子の遺品か、寒村さんがみたようにお玉さんのものか、知らない。だが、大逆事件

から七十年。須賀子の針箱というのは、いかにもそのとりあわせがあわれで心を打つ。それをまたお玉のだといつて箱書までして帰つた寒村さんの情念のようなものにも、何だか新鮮なおどろきをおぼえる。

はなしはとぶが、むかし小野十三郎に、金子文子の遺品の鍔と鉄をみての詩があつた。それは好い詩だつた。そこでこの小さな針箱の消息をこの欄にかいた。

## けつたいな話

近藤計三

先日、ある芝居の幕間に、国鉄労働者で小説を書いている友人に会い、ちよつとした立話をした。ちよつと、春闘の時期でもあり、組合の現状と政党批判みたいな話題となり、そこで、ぼくが、「もう代々木共産党批判でもないで。むしろ、いまはアンチ代々木批判をせんといかんのと違うんやるか」と喋つたら、友人はいと

も心外や、という表情をした。ぼくにしてみれば、日共の議会数取り主義は論外として、それ以外に敵がないようなアンチ代々木主義者のありようの方が、もつと問題なのではないか、いや批判してはいても、その根元での発想は同じという類すらしよつちゅうに出くわすのである。それどころか、もつとひどい自民党的発想すら平然とやつていることがある。

まして、関西では、コミンフォルム批判に端を発した50年問題の折に、共に党を除名され、いわゆる国際派と称せられた共闘感覚がいまだに戦友意識として根づよくつながつていて、ぼくなどもその末端にくついているのだらうが、ときどき何ともいえないやり切れなさが残るのである。つまり、へんな身内意識のかばい立てがあつて、批判しようものなら、なんでも身内の恥をさらすのか、といった暗黙の糾弾がじわじわと感じさせられる。そして、そういう連中に限つて、中野重治がふれてきたように、代々木の党に「鼻もひつか

けない」ような振まいでいるのである。

50年問題から、いま30年を経て、なお日共に所属して下積み的活動をコツコツやっている、あまりにも人の好い何人かの知人がいるけれど、その融通の利かぬ感覚はともかくとして、誠実さには心うたれる反面、批判は威勢だけよいが、空理空論のようなアンチ代々木にはがっかりさせられる。いや、そんな手合いはどこにでもいるのだらう。また、なまじつか善意であり過ぎることによつて、逆に間違いに気付かないのかも知れない。

## 町歩きの手定

寺島珠雄

いまやつている原稿に、本郷蓬菜町の蓬菜館という下宿屋が出てくる。一九二六年末、当時の若いアナキスト文学者がその一室に集まつて『文芸解放』の創刊を話合つたというのだ。飯田徳太郎と平林たい子のくらししていた室だつたとも、私が資料にしている本には書いてある。但、まったくちがうことを書いたものもある。その方が数として多い。

だが資料調べについてここに書くつもりはないので、同じく蓬菜

町のU館に、ほんのちよつとだけ俺もいたなあと、まだ「大東亜戦争」ではなかった（一年前か）この本郷を思い出していたら、偶然手にした『週刊文春』の四月二十四日号に「東大合格率ナンバーワン下宿屋・蓬萊館」という三ページのグラビアがあった。

現在、正しい名称は蓬萊新館だそうだが、大正からつづいてきたと説明文にあるから、即ち蓬萊館そのものなのだろう。当時から本館と新館があったとしても縁続きではあったろうし、そこまで確定させる必要はこちらにない。

しかしおどろいたし、おもしろくもあつた。

東京へ出かけても、本郷はついでに歩ける所ではないから立ち寄らないが、こんどはぐるつと一廻りしようと思う。蓬萊新館ウンスンではなしに、できたら写真をとりたいところもあることだ。

そして坂を下つて、いまはなんと変えられたか、往年の同朋町から西黒門町へ出てみたい。そこに

も、やはりちよつとだつたが、本郷のU館より前にいたことがあつたのだ。芸妓屋の別宅だつた。

さらにそうなれば、これはもう東京へ出たら必ず歩く上野駅界隈を、いつもとちがつた眼をして歩くことになるだろう。阿佐田哲也の『麻雀放浪記』が実にうまぐ描いている上野、ではない「ノガミ」の幻を求める眼である。求めても無駄と承知で、失望するはずはないのに失望してしかも満足もする——そうなのだ。それで仕方ないのだ。（80・4・26）

### 患者不在の医療

宮田正平

永い時で六年、短かくて四、五年を周期に入退院をくりかえし、主治医とのつきあいも二十年を越え、その間の治療の方法は、もっぱら投薬と検査（尿と血液、レントグラムと呼ばれる腎臓の検査、それにシンチグラムと称する心臓のX線検査）それに入院中は食餌の

塩分とカロリーが制限されるぐらいで、変りばえがしない。さしあたって障害を起こしている臓腑への処置は何もない。

去年の秋に一月ほど入院して年を越して一月半ばかり、また二月近く入院した。その折に（わらじ医者・京日記）という地域の老人医療の体験を記録風にまとめた本を読んだが、その中であつた次のような一節が心にのこつた。

「おばあさん、診察するで。前あけえナ」  
「あんたはん、見はるかナ」  
「診いでか、診なわからへんがナ」  
「ふーん」

医者がだんだん病人を診察しなくなつていく。脈をとらなくなつて久しい。患者を裸にして自分の目と耳と手で確かめようとしなくなつて長い。私はおばあさんの何げない言葉で、日本の医療への告発として、身を縮めて聞く。

患者の脈をとることも、もともと医事法違反である静脈注射をす

ところがなく、やりきれないの一語につける。入院の回数が多くなるにつれて、現在の医療に対する不信の思いが募るばかりである。

### 拝啓 黒川洋様

梅田智江

私は28号雑記で「評への反論なんて恥かしくて言えない」と書きましたが、秋山さんが「作者と評者は立場が違ふから理解が通じないものだ」と突放してしまつて、作品評など意味なしとの意見もあつて……と書いておられて、私の言

わんとすることが、全然通じてないとか、ならこの際、反論とまではいかないけれど、せめて感想なりを、お手紙差し上げます。で、その前にこの「作品評」の書き方についての疑問。なんで、試験の採点表みたいに、全員こ丁

寧に三、四行で書かれているのか。同号雑記で、和田さんが「作品評に期待するのは、詩人が内蔵している詩の世界、方法論を基にしての批評の展開である」と書いておられるのに私も賛成で、当然それは四行ではムリで、けれど、あえて四行形式にしたからには黒川さんなりの考えがあつてでしようから、そこが知りたい。

秋山さんは「作者から評者の見当違いを、その詩に即して具体的に発言して欲しい」と書いておられますが、そして私にも確に「そこから多岐な現実的な問題が引き出されよう」とは思いますが、その前にやはり私は、わからない人には作品でわかつてもらうより仕方ないという覚悟を持ちたいのです。

で、あなたの書かれた四行についてですが「不確実な面白さ」——つまり「わからなないけど面白い」ということでしょうか？

それで「何が書いてあるかわからない」あなたでしようから、次の文章「野次馬の眼のいやらしさ

の、よ、な、もの、が、感じられる」という書き方になるのでしようね。あなた流にくだいて言えば、私は野次馬の眼のおそろしさを書いたのです。あなたは、そんな眼を開をお持ちではないのですか？

（こわいのは自分だヨ。でも、なんてたつて持つてすることに気づかないヒト達が一番こわいけど）。あえて言えば、人類共通の普遍的影

—悪をみすえる精神こそが、この時代には必要なんだ。だから「いやらしさ」なんて、そんな他人事みたいに私は嫌悪していられない。さて次の「外界遮断とでもいうのか」については、以上の私のテーマから言うと、どうしてそんな感想をお持ちになったか、わからない。「パロディとしての逆説の迫力には少しばかり欠ける」についても以下同様。

それにしても黒川君。台風とか火事の時なんか、あなた、わくわくしない？ しない人もいるのがある。ああ。

することも、今や当然のこのように看護婦の仕事とされてしまつていく。すべてが西洋医学一辺倒の日本の臨床医学に、本来あるべき姿の「医療」はないとさえ思えて来る。開業医や医療機関の当事者は、医療制度が抱えている問題の解決を抜きにして、現在の医学・医療を論ずるのは片手落ちというだろう。もちろん、その意見に異議はない。しかし、誤診や医療過誤への姿勢にしばしば見られるように、所詮、医師の特権意識がなくならない限り、永年にわたる懸案の抜本的な制度の改正など、望むべくもないこともまた事実なのである。

薬の大量投与や検査づけ、おまけに入院ともなれば差額ベッド代冷暖房費、そのうえ主治医や看護婦詰所には贈り物までというに至つては、本来患者のためにあるべき医療が、医者と医療機関の経営主義にその目的がとつて代られてしまつていくとしかいようがなく、腐敗しきつた政治や企業の不平等々、世を挙げての歪みと選ぶ

### 「風景詩について」

和田英子

ひる休み、会社の売店の出入口で、買ったばかりの本をひろげている男に出会う。顔の長い巨人型で、美化班に所属し、構内構外の清掃をする人である。

どういう本だろうと、題をみると「工場管理」という月刊誌であつた。思わず顔がゆるんでくる。わらつてはいけな、と思うのだが、どうしようもない。

通勤列車から振り落され、頭を打つたというその人を軽蔑しているのではない、「この人もようやるな」という感嘆詞がまじる肯定的な笑いである。

数年前、大きな書店で女店員に大声で話をして通るのを通りかかりに見かけたことがある。電車に座つて設計の専門書を読んでいるのに出会つたこともある。

彼は事故以前の読書の傾向を持続しているのだ。理解しているか

否かは、他からは判らない。小屋

で見かけたときは、痛ましい思いがした。電車の中では、てらいがおぞましく感じた。売店で「工場管理」をよんでいる姿は、ユーモラスで、気が軽く感じた。

この人物は以前書いた詩に登場しているが、無関心でおられないのだが、場所、時間、位置が違つくと、受けとめ方も違つた感じをもつこととなる。この対象との相関関係は、微妙でたえずゆれうごく。しつように追えば、ますます細叙主義におちいり、身動きがとれなくなり放てきしてしまうことになる。

28号「前号作品評」の「車内から」の評は、一つの論理として納得がいくが、最後の、「つまりは素材主義のようなものから離別してみることひとつの方法であるかも知れない」という所は、頭をひねってしまう。詩の形式が同一パターン化していることは己れに向つて戒める事実であるが、風景と自己の内部の矛盾に満ちた相関関係の中で書き続ける外はない。

うしろに廻すのが苦痛になつてきて、寝る時には腕を何処においたらよいかと迷うほどに痛くて夜中に眼が覚め、仕方なく起きて本を少し読んでそのつかれを利用して眠るようになっていた。五年ばかり前に右の肩を病んだ時、同病の人に左に移ることもありますよといわれたがその通りになつてしまった。戦時中セレブス沖で船が爆撃でやられた時に左肩を叩かれ、暫らく腕が上らなかつた。その後遺症も重っているのかもしれないがそのために手紙も書かないで諸方に失礼している。西杉夫と野口清子等が計画している「遠地輝武追想号」に書くこと約束しながら破約してしまつた。

中野重治さんが逝かれてからもう八ヶ月余になる。第九回か十回であつたか新日本文学会の大会の時に廊下で偶然中野さんと並んで腰かけたことがあつた。その時、中野さんは私が大工であることを覚えていて話は大工道具のことになつた。その頃テレビでマキタの日曜大工用の電動ノコギリを森繁

「多頭の蛇」小野十三郎詩集集

(一九四九年日本未来派発行所刊)の中の「風景詩について」から引用しよう。

「……風景のヴォリュームによつて現実を反映せしめる代りに、そのとき詩人は自己の主観性に依據して現実を浅く掘つてしまうのである。そういう意味で、これから風景を發展さしてゆこうとする詩人は、すぐれた書家たちがやってきたように、長い間かかつて、記憶を練磨し、記憶で形象を満たしてゆく習慣に類似した方法を、もつと執拗に、詩作行動の前提に置く必要がある。志賀直哉の言葉「対象からもつと離れ、しかも強く、それに即く」ということも、ここにおいて大いに参考とするに足る。……」

示唆に富む言葉である。

### 寸評にこたえて

緒方宗平

「日経」三月三〇日によると「日

がコマーシャルで流して、中野さんはそれで知つていたのだろう」君、あれは便利だから買おうと思つているんだ」といつた。電気鉋も使いたいといつていた。その頃、毎日新聞に「大工さんの道具が機械化してきて仕事がらくになつたように結構なことだと思つているが日曜日の朝早くから電気鉋のやかましい音が悩まされるのに閉口することは出来ないものでしょうか」という主婦の好意的な投書があつたことをいって、休日には電動機械は注意して使つた方がよいですよ」と私はいつた。中野さんはその時うなずいてから「僕はね、大工道具の専門店からその店で最高の鉋を買つたんだ」といつて少し間をおいてから「その鉋は杏掛において盗まれてしまつたがね」と残念そうにいつた。中野さんの「一流好み」は噂にきいていたので、やつぱりそうかと私は心中でうなずいたが、その鉋の「銘」はきかなかつた。そして「電気鉋を買うのでしたら「愛知」の製品が騒音

本人の死因が脳卒中が結核を抜いて

トツブになつたのは二十六年、その時点のガンの順位は結核、肺炎、気管支炎について四位だつたがガンはその後わずか二年で二位になつた。さらに三十三年から一位脳卒中中、二位ガン、三位心臓病となり五十二年までずっと變つていない。「ところが五十四年――十月の累計では脳卒中の死亡率が一三五・四に対してガンは二三五とわずか〇、四ポイントの差で急速に追いあげている」そうである。一昨年の二月に親戚の者がガンで死んだ。まだ若い女である。二度目の入院のときに、日本ではなかつたが試験管ペビーが生まれた、或は作られた。そのことは医学の進歩であるかもしれないが、そうして素直に私は受け取ることができなかつた。今日明日をも知れぬ死の瀬戸際にたつていて者をつめているとき、なにか間違つていないだろうかという思いであつた。医学の遊び、遊びの医学ではないかとおもつた。そのおもひのなかでコスモス二十四号に「冷た

### 近況あれこれ

松永浩介

私はいま左の肩を病んでいる。いわゆる「五十肩」というやつらしい。痛いアと自覚したのは去年の三月頃であつたが軽い仕事なら出来るので強く意識しなつて過せてきた。それが今年になつてから痛みが強くなつて、折り曲げや

を他社のものよりひくくしてあると聞いているので私はその現物をまだ見ていませんが道具屋で調べてもらつた方がよいと思ひますよ」と注意した。「僕は家を建てるなら二百年位は持つのにしたいね」と中野さんが洩らしたのはその時であつたように覚えている。

### 雑記

野口清子

五月二日、東京のどまんなか北の丸公園の入口に、天皇を中心とした国家再建をよびかけた横書きの大看板が立てられているのを見た。

五月一日から四日まで「生長の家」谷口雅春を教主とする宗教の全国集会が開かれていた。一日目は成年女子、二日目成年男子、三日四日は青少年男女(小学生から大学生まで)の研修会というところで、四日間広い武道館が満席になる程、信者が集つてきた。会が始まると扉を閉ざしてしま

うのだが、三日目青少年大会の開会式にすべりこんでみた。ポリウムをあげたオーケストラの演奏が会場の空気を盛りあげている。舞台右側に教主夫妻の席が直立の姿勢をくずさず、旗を掲げ会場をかこんで並んだ姿は、何やら軍国日本の再現を見る思い。ファシズムの足音を感じてしまう。彼らの挨拶は一も二も「ありがとうございます」と手をあわせること。

ありがとうございます。君に忠義、親に孝行、老人を大切に。おはようも、こんにちわも、すべて「ありがとうございます」です。ありがとうございます」となえて洗脳される。

「あやまちはくりかえしません」と広島島の原爆記念碑にきざまれた言葉が私の心に明滅する。そして今、人間は、日本人は、「あやまちは何回でもくりかえすのではないか」という思いにとらわれている。

## 批評の態度

清水 清

27号の伊藤正斉の雑記「ほめかた」に「先号の(作品評の)黒川も清水によく似たところがあるが今のところ清水の悪いところばかりが目立って」という批評的発言がある。この「清水の悪いところばかり」とは具体的にどういふことだろうか。何ひとつ説明されていない。引き合いに出された私は何がどう悪いのか理解の手がかりがないし、悪いところばかり似ていると評された黒川洋も納得できない。

伊藤のこの「悪い」というのは評価であり、判断の結論である。好き、とか、嫌いということも、ひとつの結論的表現だが、この方だと、理屈でない生理的な場合もあるから、この場合は問わないとして、「悪い」という判断は論理の上に構成された批評だから、当然結論を引き出した内容の説明がなくては批評として無責任である。それをしないで結論だけ言い放すのは、誠実さを欠いていると私は思う。

## 一三二二号室より

伊藤 正 斉

むかひの四階建の病棟の一階にある霊安室の車よせに棺を積みこむ細長い車がとまった。雨が降り出した昼さがり、まもなく二人の男が棺をかかえて出てきた。棺によりそって来た看護婦が棺にいてねいに頭をさげた。棺が積みこまれ、車の往き来のはげしい国道へまぎれて行った。

むかひの三階建ての中部電力の営業所の建物が見える。茶色に黒のまじったタイルがはりつけてある安ものの建物だ。屋上には小さな無線の塔と、そのとなりに飛行機の風見のプロペラが廻っている。雨があがって、すさまじい大夕焼だ。飛行機の風見は北西をさしている。

ここは第一病棟の三階。132号室の六人部屋。みんな珪肺病患者ばかりである。朝ベットにめざめると、風見の飛行機が見えるだけの窓の風景。入院したときは桜の花がちらほらのころ、今は若葉から青葉の季節になった。ここ一週間ほど朝夕の冷えが体にこたえた。まだ霊安室へおりてゆくわけにはゆかぬ。なにかまたの骨壺を作ってからでなければ。霊安室の前にはまた一台の車がとまった。こんどは毛布につつんだ死者がはこび出されてきた。

手の成長に手をかすという側面もある。しかし、批評がそんな教育的態度をもつのは上と下の関係、例えば師弟とか、先輩後輩といった関係の中だと私はきめている。

だから、私はコスモスの作品評を書いていたあいだ、一度もそんなことを顧慮したことはない。私にとって批評は、対象の作品と力いっつばい切り結ぶことであり、批評そのものは私の作品だと考えてきたし、それが批評の誠実であると私はいまも確信している。

「こいつは、ほめてやった方がよいになる」とか、「ほめた方が創作意欲を昂める効果がある」などと考えるのは批評者の思いあがりであり、批評の墮落である。活字になつて出てきた以上、作品は一本だちである。指摘するのが批評の仕事であつて、教えるのは役目ではないときめて、私はこれからもそういう批評を書くつもりだ。松永のいう木刀批評で、駄目になるのなら、それは駄目になつた方の責任である。(一九八〇・五)

## 歌人哀果、私の思い出

秋山 清

土岐哀果が死んだ。しかし「土岐哀果がー」などと書くことに人は私の不遜を感じるかも知れないが、私のそれは、親しみであり尊敬であり、まず啄木の友人の名でその人の存在を知つた者として、どの新聞の見出しも「土岐善麿」氏と出ていることに、小さい不同調を感じた。彼自身、哀果のペンネームを使用せずなつたには、一歌人としての自己を閉じてより大きく自分を育てようとする思い(あるいは育つたという自信)があつたのかもしれない。

私が哀果や啄木の名を知つたのは中学三年(大正八、九年)の頃、牧水の『和歌講話』を読んだときである。彼は私より二十才ほど年上だから、その頃三十五、六十、そのローマ字歌集「NAKIWARAI」や「街上不平」はずっと前に出ていた筈である。この四月

十五日の死が九十四才だったとすれば、その生涯の仕事と年月はずいぶん長かつたことになる。私など七十才を越したばかりで、六年後のハレー彗星まで持つかなどといえた義理ではない。

私は昭和三年から二年ほど朝日新聞社でエレベーターボーイで働いたことがあり、そのとき土岐さんは調査部長だった。エレベーターの中で、新居格と新島栄治の二人から別々に土岐さんに紹介されたが、それ以前に一度啄木の記念集会でいっしょになつたことがある。多分、それは大正十四年の四月だった。二十人ばかりの集まりに、まだ啄木を知る人も今のようではなかつた頃、新島栄治が働いていた家庭購買組合の渋谷駅近くの事務所だった。私の遠い記憶では金田一京助さんと二人いっしょに見えたと思う。金田一さんはあまり話さなかつたが、土岐さんはさかんに話した。啄木を通じて知っている高名な二人の目を目のあたりに見て、田舎出の私はいくらか興奮気味だった。その日の同席者には松本淳三、陀田勘助、壺井繁治もあり、私は「詩戦行」の同人の斎藤峻と小林一郎に連れられた行つた。詩人の集まりなどというものに出た私の、はじめてのもので、記憶に深い。

「朝日」のエレベーターの中で、「詩、書いていますか」と声をかけてくれたこともあつたが、その頃は詩とはすこしずつれたところ歩きまわつていた。戦後の日比谷図書館長の頃、新日文の用事で訪ね、すすめられるままにその後私が歩いてた道について少し語つたこともあつた。私もその頃には明治の大逆事件の後、始めての社会主義雑誌「近代思想」(大杉と荒畑編集)の協力者だった土岐さんのことも知つていた。戦後一九五一年に素晴らしい講師を集めての啄木の会があり、私が司会者をつとめたが、講演よりも講師控室の空気が面白かつた。土岐哀果、兼常清佐、野村胡堂、金田一京助、平野謙、銭形平次の胡堂には土岐さんの注意で講演を頼みに行つたのだと思う。